仁和寺所蔵

『薄草紙伝受記』紙背文書

歴史研究室

この『薄草紙伝受記』は若干が散佚し、現存するのは8冊のみである(仁和寺塔中蔵第40箱所収)。8冊共に古文書の紙背を利用して書写されている。古文書を上下に折って折紙とし、その一端を紙撚で綴じて長帳仕立とする。紙背文書中、年紀の明かなものは元亨―建武の間に属し、また本文の書風より推しても、本書が書写された時期は建武年間よりやや後、即ち南北朝時代初期を降らないものと考えられる。この紙背文書は数も多いので、ここでは内容的に比較的まとまっている但馬国下鶴井庄関係文書中から、主要なものを選んで紹介したい。

但馬国下鶴井庄は旧城崎郡、現在の兵庫県豊岡市下鶴居付近に当る。弘安八年但馬国大田文に当庄は「法勝寺領、領家真乗院僧正、預所教王院三位法印」と見える。この領家は(7)下鶴井庄預所相伝系図に見える右大臣僧正裔助、預所は房弁のことと考えられる。この大田文の記載と合せ考えると、この相伝系図の内容は更に明瞭となるが、庄園の預所職以上の上級職の伝領過程を、或期間にわたって具体的に知ることの出来る史料は比較的少なく、興味ある史料といえる。

(1) 法勝寺常行堂東釣殿現在修理注文

(端裏書)「常行堂東釣殿現在修理注文木工方」

注進　法勝寺延命堂下鶴井役二間当寺修理分用途事

合

目木三支　垂木料　代百廿文

河下板二枚　裏壁料　代廿文

手取木一支　簀子料　代七十文

大手取下二支　柱継高□料(但柱不継之)　代百四十文

手取木一支　キヲイカヤイノ料　代七十文

釘　代五十文

工十人　八百文

車力一両　五十文

都合壱貫三百二十文

余剰捌貫弐百陸十文

(2) 下鶴井庄庄官名主百姓等言上状(元亨三年七月日)

下鶴井御庄々官名主百姓等謹恐々言上

欲早任損亡実蒙御免成安堵思子細事、

右当年四月廿八日洪水、又七月一日高塩、同月十六日依大洪水等、雖為一国平均損亡、就中於当御領者、為八部流末之間、殊以令損亡作毛

等ニ、被見知御代官之上者、□実正有御注進者歟、猶相残御不審者、任先例可令書進上起請文者也、所詮任損亡実蒙御免、欲成安堵思、然者弥仰御憲法之貴、仍粗恐々言上如件

元亨三年七月　日

（3）沙弥覚阿書状（七月一日）

依去年御年貢未進、当年上葉夫代等事、六月二日御札委細承候了、御使相共未進上葉沙汰進候、且注進状并納帳等令進候、兼又雖無指事候、連々可申入由相存候之処、諸事依目労候て、不心候事恐入候、又御領畠以下御沙汰何様候哉、無心本令存候、急速御沙汰候者何目出候なん、委細難尽状候、含申御使候了、恐惶謹言、

七月一日　　沙弥覚阿

進上　　御部屋

（4）（下鶴井庄カ）名主百姓等請文（閏正月五日）

去月十七日御教書、同廿三日到来、謹拝見仕候畢、如被仰下候者、去年雑米夫代上葉以下年貢未進事、可令究済之由被仰下候、随堪々令弁進候、次於段銭者先度如令言上候、自法勝寺堤垣外者、如此天役自往古無其例候、然者沙汰仕候事難叶候、当座身命難継候之間、凡去年大洪水ニ堤皆以及大破候、自上不御合力候者、以私力計者難仕候之由、対于御代官連々雖令言上候、于今不事行候条歎入候、可然者預御計候、猶以及御不審候者、以実正御使可預御検見候、以此旨有御披露候、恐惶謹言、

閏正月五　日　　名主百姓等請文

（5）下鶴井庄条々事書

下鶴井庄条々

一　損亡事

当年既得之条無其隠之処、寄事於水自由申状太不可然、非御沙汰之限矣、

一　坊仕魚事

任申状之旨、被尋禅教行善了智等之処、縦雖不居置代官定使等於地下、有限為天役之間、無闕怠致其沙汰云々、此上者、云年々未進、云当年分、不日可致弁沙汰者也、

一　一束稲等口米事

如申状者、宮内卿阿闍梨施行非例云々、欲被尋之処、下向尾州、帰洛之時、可被仰左右矣、

（6）下鶴井庄条々事書

下鶴井庄条々

一　当年夫代上葉以下事

不日加譴責、可□（令カ）注進者也、

一　政所犬殺害事

可注進交名之由、先度雖被仰下、于今無申入之旨、而於惣内男屋内令殺害云々、此上者彼男早可追放庄内矣、

一　房仕魚事

先例令致沙汰之条、無子細之処、任雅意違背度々仰、令難渋云々、太以不可然、早可致其沙汰、若猶申子細者、骨帳（張）之輩可令注進交名矣、

（7）但馬国下鶴井庄相伝系図

（端裏書）「事書具書案　建武四七廿六」

但馬国下鶴井庄□相伝系図

本領主帥入道清隆卿孫　内大臣公経公女

法住寺禅尼―又号三条禅尼ゝ元久承元両度載慇懃之旨、譲与帥中納言清隆息女覚教僧正早

―■■■■■女

―左大臣僧正

―大納言僧正

―覚教、号真乗院大僧正、当庄始而寄附真乗院門跡、

―房円、真乗院

―右大臣僧正

―斎助　真乗院　建治四年正月八日限永代一円不輪譲与房弁法印早

―右大臣僧正

―深助　真乗院　斎助僧正限永代雖譲房弁法印彼門跡聊致違乱之間正応四年四月八日重又契約之

―三位法印

―房弁　教王院　正広四年　三月ゝ日譲与親忠早

―左衛門督法印

―親忠　皆明寺ゝ（対勘解由小路二位家。当庄預所下司職訴陳正安延慶両度蒙安堵勅裁了）延慶四年四月日門跡幷所領等事申置真光院前大僧正早

―内大臣僧正

―禅助　真光院　皆明寺門跡等事任親忠ゝ法師所務之時申置之間為真光院計嘉暦二年八月旨

■十三■日譲付道淵大僧都早

大納言僧都　道淵　皆明寺。受真光院之譲門跡領等被領之、当領主建武三年十月日当庄預所下司職任度々勅裁□知行之由蒙■勅裁了、則武家被成施行者也

（8）下鶴井庄雑掌言上状案（嘉暦二年閏九月日）

（端裏書）「法勝寺修理土代木工方」

但馬国下鶴井庄雑掌謹言上

早欲被経御　奏聞、被停止法勝寺修造ゝ奉行僧非分奸謀、被返渡余剰於雑掌、致丁寧沙汰当庄所役未作所々間事、

副進

一通　御修理ゝ本損色注文案木工方此外壁並檜皮未及校合

一通　常行堂（釣）殿当時御修理注文同

右御修理者、朽損之時、為雑掌沙汰加修理之条、往古之例也、而今度以別儀被下損色注文、可送遣聖方之由被仰下之間、雖為不応之高損色、綸言依難背、已千五百ゝ足致其沙汰了、爰当時修理分不及十分之一歟、不審之余相尋子細之処、於（釣）殿者大略終造功云々、以過分損色致瓜弱之修理之条、奸曲之至眼前也、如当時修理者、朽損又不可有程、不便之次第也、所残損色料纔四百余疋歟、而引隠莫太損色料、称無沙汰預厳密之譴責之条、難堪之愁訴也、所詮雑掌所申実否有御不審者、速被遂検見之時、彼不法不可有其隠者歟、早返賜抑留物、為雑掌沙汰、未作所々不日可致丁寧修理之由、欲被経御　奏聞矣、仍粗言上如件、

嘉暦弐年後九月　日

（田中　稔）